

第 62 回 日本生殖医学会 学術講演会

0-102

山口, 2017. 11. 16-17

異常卵割胚の有用性の検討

関藤 孝昭、櫻井 裕子、宮本 有希、富田 和尚、大住 哉子、長滝谷 芳恵、
幸池明希子、森本義晴

医療法人三慧会 HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】

ヒト胚において異常卵割により発生能が低下するという報告は多く、当院でも移植胚選別の際は正常卵割胚を優先している。しかし、異常卵割胚しか得られなかった場合や、正常卵割だが卵割停止等の理由で、異常卵割胚を移植せざるを得ない場合もある。本研究では異常卵割胚の有用性を、移植後の臨床妊娠率及び胚盤胞への発生能において、正常卵割胚と比較することで検討した。

【方法】

インフォームド・コンセントを得た上で、2016年8月から2017年4月に体外受精-胚移植を行った65周期286個の受精卵を対象とした。一般体外受精もしくは顕微授精を行い、受精後3日目に胚移植、余剰胚は5、6日目まで培養継続した。タイムラプス観察にはCCM-iBIS (アステック社)を使用し、30分毎に画像取得を行った。正常卵割した胚(A群:154個、うち胚移植53個)、第二卵割で初めて異常卵割を示した胚(B群:27個、うち胚移植4個)、第一卵割で異常卵割を示した胚(C群:105個、うち胚移植8個)の3群に分け、各群の臨床妊娠率及び胚盤胞率、良好胚盤胞率(Gardner分類3BC以上)を比較した。

【結果】

臨床妊娠率はA群で20.8%(11/53)、B群で50%(2/4)、C群で0%(0/8)であり、A、B群間で有意な差は無く($p=0.19$)、C群では妊娠例が無かった。胚盤胞率、良好胚盤胞率はA群で81.2%(82/101)、48.5%(49/101)、B群で47.8%(11/23)、8.7%(2/23)、C群で28.9%(28/97)、7.2%(7/97)であり、A群と比較してB、C群では共に有意に低かった($p<0.01$)。

【考察】

第二卵割異常胚を移植した際の臨床成績は正常卵割胚と差は無く、形態良好であれば移植可能胚として扱うことが出来ると示唆された。一方、第一卵割異常胚では妊娠例が無いことから、第一卵割異常が発生に与える影響は大きく、有用性は低いことが分かった。また、異常卵割胚でも良好胚盤胞まで発生するものもあり、融解胚盤胞移植後の成績を確認することで、検討を重ねていきたい。